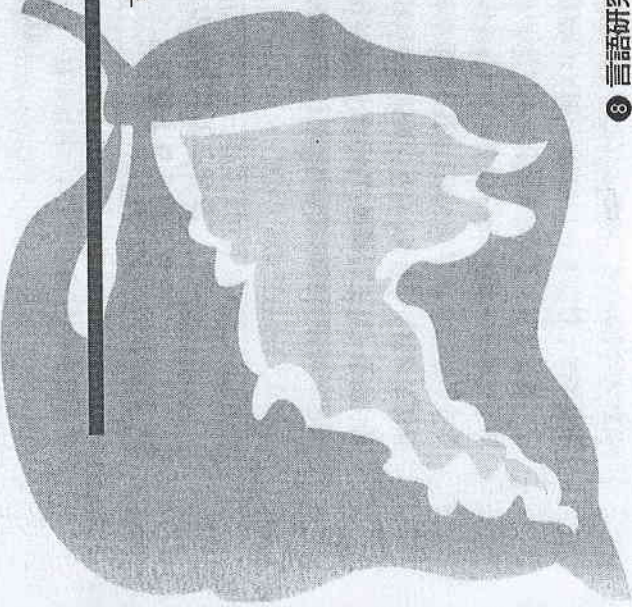


第1章

言語と言語学

- 
- ① 言語とは何か
 - ② 言語記号
 - ③ 分節
 - ④ ラングとパロール
 - ⑤ 構造
 - ⑥ 体系
 - ⑦ 共時態と通時態
 - ⑧ 言語研究の方法と言語学の諸分野

この章では、人間の言葉とは一体どのような性質をもっているものなのか、そして、それを研究の対象とする言語学とは、どのような考え方や方法によって行われるのかを概観します。

1 言語とは何か

POINT

- 言語とは意味を音声によって伝達する手段である。
- 意味を伝達する最も重要な単位は文である。

1 言語の定義

私たちは日常生活で、他人に何かを伝えるために言語(ことば)を使います。言語は、人間が社会生活を営むのに必須のものであり、人間が人間として出現したときにはすでに完全な言語を使用していたはずで、「完全な言語」というのは、現在、私たちが用いているのと同じ程度の仕組みを備えた言語という意味で、言いたい内容はすべて完璧に伝えられる言語、という意味ではありません。ある動物が人間と呼ばれるためには、言語を使用しているか、あるいは言語を使用できる能力を備えたものでなければならぬのです。

言語を用いる場合としては、他人への伝達以外にも、独り言を言ったり、心の中で何かをことばにして思う場合などがありますが、これが言語使用の本質を形成しているとは思えませんし、これらの場合は、伝達する相手が他人ではなく自分であると考えればよいでしょう。

それでは、言語は何を伝えているのでしょうか。例えば、朝起きて「今日は天気がいいね」と、家族の誰かに言った場合を考えてみましょう。この文には「意味」があります。意味とは何か、という問題は後で考えることにしますが、私たちは言語によって意味を伝達していることは確かです。そして、この文を「言う」ということは、私たちの口から出た「音声」が相手の耳に伝わって、それを相手が理解するということです。ですから、言語とは意味を音声によって伝える手段だと定義することができます。

もちろん、言語の意味を伝える手段としては、文字もありますし、耳の不自覚な人々が使う手話もありますが、これらは音声を聞いた言語がまずあって、それを別の方法で表現しようとするものだと見なすことができま

す。また、文字や手話をもたない言語は数多くあるのですから、やはり意味を媒介する手段としては、音声を第一に考えるべきです。

2 意味を伝達する単位

「今日は天気がいいね」は、文という単位を構成しています。私たちが言語を用いて誰かに伝達する時には、文を用いるのが原則です。朝起きていきなり、「今日」とか「天気」とか「いい」とか「いい」という単語だけを言ったとしても、相手は一体何のことだかわからないでしょう。単語にももちろん意味はありますが、伝達に必要な情報を与えることができるのは、文によって伝えられる意味だけです。単語を言うだけでも十分に伝達が行われることもありませんが、それは、「いつ出かけるの」と聞かれて「今日」と答えるような場合です。ここでは、もうすでに必要な情報が他に与えられているので、単語を言さえすれば相手は十分な意味を完成させることができます。つまり、「私は今日出かける」という文を言おうとしているのですが、「今日」というだけで、相手は他の部分を即座に理解することができるわけです。

2 言語記号

POINT

- 記号は能記と所記から成る。
- 言語は記号である。
- 言語記号の能記と所記の間の関係は恣意的。

1 記号

人間が知覚することができる何らかの表象に意味が結びついているものを記号と呼びます。記号というと、地図に使われているものや、数学で用いるものだけではありません。例えば、交通信号は、「赤」「青」「黄」という3つの色に、それぞれ「止まれ」「進め」「注意」という意味が与えられていますから、記号だと言えます。また、救急車やパトカーなどのサイレンは、あの「ピーポー」や「ウーウー」という音が「緊急自動車が近づきつつある」という意味を表すのですから、やはり記号です。スイスの言語学者ソシュールは、記号の一面である、目に見える形や色、耳に聞こえる音などを能記（シニフィアン、記号表現）、他方の面である意味を所記（シニフィエ、記号内容）と名付けました。つまり、すべての記号は能記と所記から構成されているわけです。

能記（記号表現）		所記（記号内容）
(交通信号)	「赤」「青」「黄」(色)	「止まれ」「進め」「注意」
(パトカー)	「ピーポー」「ウーウー」(音)	「緊急自動車近づきつつある」

2 言語記号

私たちの用いている言語は、文であれ単語であれ、意味に音が対応するという仕組みがありますから、やはり記号だと考えることができます。記号としての言語を言語記号と呼び、言語記号の所記はその意味であり、能記は音ということになります。言語は、記号の中でも最も複雑な仕組みを備えたものです。

3 言語記号の恣意性

「あし」という単語を考えてみましょう。この単語は、私たちの身体のある部分を指していますが、この身体の一部を表すためには必ず「あし」と言わなければならぬかという点、そうではありません。たまたま日本語でそのように言っているだけだと考えられます。他の単語についても同様で、ある意味に対して、必ず特定の音が対応しなければならぬという必然性はどこにもありません。もし、意味と音の関係が必然的なものならば、新しいものが作られた時には、その名前は自動的に決まるはずですが、そうではないのですから、やはり意味と音の間に関係はないのだと思ってい

いでしよう。
言語記号の能記(音)と所記(意味)の間に、何らの関係がないことを言語記号の恣意性と言います。言い換えれば、言語記号の能記と所記の間の関係は恣意的なことなのです。言語記号の恣意性は、次節で説明するように、言語の性質を決定する重要な要因となっています。

また、日本語の「あし」という単語を表す身体部分の部分は、英語ではleg(足首から上)とfoot(足首より下)の2つの部分に分けられます。一方、英語のwaterという単語の表す物質は、日本語では「みず」(冷たいもの)と「ゆ」(暖かい、または熱いもの)の2つに分けられます。このように、言語が違えば、ものや現象の区分の仕方が異なるのが普通で、これをもう1つの意味での恣意性と言ふことができます。この意味での恣意性があることが、外国語の習得を困難にしている1つの原因であると言えるでしょう。

3 分節

POINT

- すべての言語で、文は単語に分節される。
- 能記のレベルでは、文-単語-音という二重の分節がある。

1 文の単語への分節

文は事柄を表しますが、私たち人類がこの世に生き続ける限り、新しい事柄は次々に生じてきます。つまり、文が表すべき事柄の数は無限だということですが、そうすると、文の数も無限に多くなければなりません。

単語のない言語というものを考えて見ましょう。この言語を用いる話し手が、新しい事柄を表すために音を並べて、ある文を作ったとします。この文は、新しい事柄を意味するのですから、その能記である音の配列も、これまでにその言語にはない新しい配列であるはずですが、ここで、「言語記号の恣意性」を思い出してください。言語記号の恣意性は、記号の所記と能記の間に何の関係もないということでした。ですから、この新しい文の能記である音の配列を聞いたとしても、聞き手はそれを、話し手が伝えようとしている新しい事柄に対応させることができず、要するに、この文の意味を聞き手は理解できないということになります。このような言語を用いたのでは、伝えることのできる事柄の数は限られたものになってしまいます。

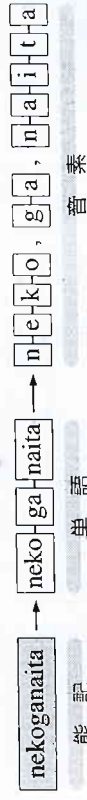
このような事態を避けるために必要な仕組みが、単語を組み合わせて文を作るということです。話し手と聞き手の両方が知っている単語を十分な数だけ用意しておいて、それを並べて文を作ることになり、単語の意味を合成して文の意味を作り出す規則が言語に備わっていきさえすれば、どんな新しい事柄が生じたとしても、話し手と聞き手の双方に知られている単語を並べるという方法だけで、その事柄を伝えることができます。例えば、「空を飛ぶ犬がいた」という文は、これまでに起こったことのない新しい事柄を表していますが、それを表すために用いられている単語は「空」「を」「飛

ぶ」「犬」「が」「いた」であって、すべて日本語の話者には知られている単語です。

言語が、どんな事柄をも伝達することもできるような手段であるためには、必ず文が単語から成り立っていることが必要だということが、上のことから説明されます。文が単語に分けられることを、単語に分節されると言います。

2 二重分節

文であれ単語であれ、その能記は音を並べることによって作られます。この場合の「音」は、言語を用いている人間によって明確に他の音とは区別される単位です。言語におけるこのような音的単位のことを「音素」と呼びます（音素の詳しい定義については、第2章を参照して下さい）。従って、能記のレベルだけで考えてみると、文の能記を構成する音素の配列が、まず単語の能記の音素の配列に分節され、さらに単語の能記は個々の音素に分節されるという仕組みになっていることがわかります。「猫が鳴いた」という文を例にとるならば、その能記の nekoganaita は、まず nekoga-naita のように3つの単語に分節され、それぞれの単語の能記は、n-e-k-o, g-a, n-a-i-t-a という音素に分節されます。



言語のこのような分節を二重分節と言います。動物が用いている伝達の手段には分節がありませんから、分節の存在は人間の言語の重要な特徴だと言えます。

4 ラングとパロール

POINT

- 言語には、ラングとパロールという2つの側面がある。
- ラングは話者に共通の抽象的存在であり、パロールはラングの具体化したもの。

① ラングとパロール

私たちが使っている日本語は、いくつもの方言に分かれていますし、同じ方言を話している人も、年齢や性別、職業などによって、人々が使用することは異なっているものです。ですから、極端に言えば日本語を用いるすべての話者のことばは、皆それぞれ異なっているとも言えます。それでも、私たちは日本語を使って互いに意味を伝達することができますのですから、私たちは日本語の「日本語」というものがあると考えなければなりません。このように、ある言語の話者が共通に存在を認めていることばを「パロール」としてラングと名付けました。ラングは従って、実際に話される具体的なことばとは異なる、あくまでも抽象的な存在です。これに対して、ラングが個人によって、特定の場面で使用されたものを「パロール」と言います。

② ラングの特徴

ラングは、ある言語集団に属するすべての個人の言語（「個人語」と呼ばれます）の共通性を抽出したのもとも言えますが、それではその共通性とはどのような点に見られるものなのか。私たちの用いているラングである日本語を例にとりて考えてみましょう。まず、すべての日本語話者の個人語について、その「文法」は共通であると考えられます。文法とは、狭い意味では文を構成している単語の配列の規則を言いますが、日本語であれば名詞の後に助詞が来るとか、動詞の活用形の後に助動詞が来るなどの規則は、すべての話者に共通です。また、もっと広い意味の文法に含まれる、助詞や助動詞、指示詞の用法、時制組織などにも共通性があります。

この狭義・広義での文法を共有することが、複数の個人語が特定のラングを構成する最も重要な指標だと考えられます。言い換えれば、私たちが日本語を使用するときには、どんな場合でもその文法が定めている規則に従うということです。

次に、使用される語彙の中核部分の共通性があげられます。語彙は、同じ方言でも個人によってかなりの差異がありますし、方言間での差異も相対的なものであることは確かです。しかし、「やま」「かま」や「かわ」などの自然物の名称や、「め」「て」「あし」「あし」などの身体部分の名称など、基礎的な語彙に関しては共通部分が大いはいはさず、「テレビ」「コンピュータ」などの外来語はどの方言でも同じでしょう。

最後に、音素の組織の共通性をあげることができます。個々の日本語話者が実際に使用する音素は、それぞれに少しずつは異なるものであるにしても、ある一定の範囲におさまるものであり、それらの音素をその果たす機能という観点から分類するならば、最終的にはほぼ同一の組織にまとめ上げられると考えられます。

このように、ラングとは、① 文法、② 語彙、③ 音素の点で共通の個人語の集合体として見なすことができます。言語学において分析の対象とされることばとは、このラングのことを指します。

5 構造

POINT

- 文を構成する単語の並び方には規則性がある。
- 単語の並び方を、ある理論に基づいて示したものを構造という。

1 言語の線状性と要素の配列の規則性

記号の能記は音素によって構成され、複数の音素を同時に用いることはできませんから、能記は音素の列として実現されることとなります。これを言語の線状性と言います。従って、文は単語によって構成されますから、文も単語の列として実現されます。

ところで、文を構成する単語のうち、文の意味する事柄の枠組みを作るのは「述語」であり、日本語の述語は動詞・形容詞・「名詞+だ」の3種類があります（「花子が走っている」「花子は美しい」「花子は学生だ」のような文の述語が例としてあげられます）。述語が意味する事柄の枠組みに、その事柄の「主体」や「対象」、あるいはその事柄の向けられる相手である「受容者」、その事柄が起こった「場所」などを表す名詞を割り当てることによって文が完成されることになります。

- (1) 太郎が 花子を 次郎に 喫茶店で 紹介した。
 主体 対象 受容者 場所 述語

上の文(1)の述語は、「紹介した」という動詞であり、主体は「太郎」、対象は「花子」、受容者は「次郎」、場所は「喫茶店」です。

主体や対象などのことを意味役割と言いますが、日本語では名詞の意味役割を「が」や「を」などの助詞によって表します。ここで、日本語が意味役割を表すための助詞のような単語のない言語だと仮定してみましょう。(1)は(2)のようになります。

- (2) 太郎 花子 次郎 喫茶店 紹介した。

助詞がなくても「喫茶店」が場所であることはわかりますが、主体、対象、受容者が誰なのかはこれではわかりません。助詞を使わずに意味役割を表す手段としてありうるのは、動詞と名詞の位置関係だけです。例えば、動詞の左側にある名詞は主体、右側にあって、最初に来るものは受容者、次に来るものは対象などを決めるわけです。英語や中国語には主体や対象を表すための単語がありませんから、この動詞との位置関係によって名詞の意味役割が表されています。

このような言語では、従って、文中の単語の並び方にはきちんとした規則性がなければならぬこととなります。また、助詞のある日本語のような言語であっても、例えば、次のような文はありません(文の前にある×は、この文が正しくないことを意味しています)。

- (3) × 太郎 花子 次郎 がをにで 喫茶店 紹介した。

このような文を用いることができないのは、それぞれの助詞がどの名詞の意味役割を表しているのかがわからないからです。助詞は、名詞のすぐ右とか左にあることによって(日本語では右側に来ます)、その名詞の意味役割を表すことがわかるわけで、(3)のように名詞から離れた位置にあったのでは、結局、意味役割を表す単語としては機能することができなくなります。

従って、意味役割を表す単語のある言語であったとしても、やはり単語の並び方には規則性が必要になります。以上のことから、文が事柄を表すのであれば、それを構成する単語の配列は、ある規則に従って行われることがわかるでしょう。

KEYWORD

線状性/意味役割

② 構造

文中の単語の配列に規則性があることを、文に構造があると言います。構造とは、一般的には、ある単位がある規則に従って配列されてより上位の単位を構成する場合、下位の単位の配列の規則性が明示的になるように表示したものを指します。ですから、構造の表し方は、規則性をどのようにとらえるかによって異なるものです。上の(1)の構造は、例えば、次のような形で表すことができます。

(4) a. 主語句+直接目的語句+間接目的語句+場所句+述語

b. 名詞+助詞+名詞+助詞+名詞+助詞+名詞+助詞+動詞

(4) a.と(4) b.では、単語の分類の方法が異なっています。前者では、単語を「主語」や「目的語」のように、その機能という観点から分類しているのに対し、後者では、単語の属する品詞が問題になっています。また、このような構造の表し方は、日本語のすべての文の構造を適切に表すためには不十分でもあります。従って、構造を表示するには、単語の分類や配列の規則性を処理するための、一種の理論が必要になります。この理論に基づいて、文の構造が表されるのです。

このような理論は、物理学の理論のように高度な数学などを用いる必要は必ずしもありません。しかし、ある言語で可能な文の構造をすべて正確に予測することができるような理論ならば、それほど単純なものではありません。これも確かです。

なお、音素の配列にも規則性があることは確かです。日本語の音節はe(絵)のように母音だけから成るもの、ki(木)のように「子音+母音」という形のもの、mon(門)のように「子音+母音+子音」という形のもの3種類がありますから、母音をV、子音をCで表せば、日本語の音節の構造は、(1) V (2) CV (3) CVC のように表すことができます。英語にはstrikeのような単語があって、これは1音節ですから、この音節の構造はCCCVCとなります。

6 体系

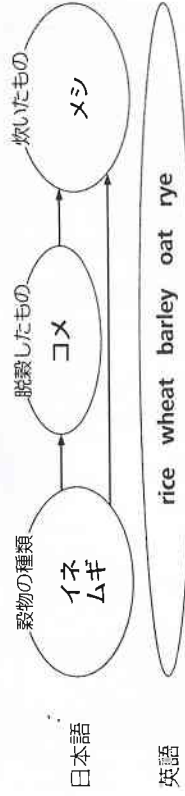
POINT

- 言語に属する要素で、同じ特徴をもつものの集合は、相互の関係でその特徴が決定される。このような要素の集合を体系と呼ぶ。

1 体系

単語は、私たちの世界を構成する個体や事柄の集合を適当に区分して、その部分的な集合を所記とし、それに能記が対応しているものです。単語の所記=意味は、それがどんな集合を指しているかによって決まるものから、その集合の性質を確定するためには、同種の他の集合とどのような関係にあるのかわからなければなりません。Xという集合があつて、それがさらに {a, b, c} という3つの部分集合に分けられる場合と、{a, b, c, d} という4つの部分集合に分けられる場合とでは、それぞれの部分集合に含まれる要素は異なつてきますから、その性質も変わるということになります。

具体的な例で考えてみましょう。日本語では田んぼまで作られる作物のことを「イネ」と言い、それを脱穀してできるものを「コメ」、さらにコメに水を加えて炊いたものを「メシ」と言います。また、畑で作られる穀物の一種に「ムギ」がありますが、それを脱穀したのも「ムギ」と言い、ムギを炊いたものはやはり「メシ」です。一方、英語では「イネ」「コメ」「メシ」はすべて rice です。しかし、ムギについては、炊いたものとそうでないものを区別することはありませんが、wheat <コムギ>、barley <オオムギ>、oat <カラスムギ>、rye <ライムギ> などに区別されます。この関係を図で示すと次のようになります。



従って、例えば日本語の「コメ」という単語の意味は、「ムギ」との関係だけでなく、「イネ」と「メシ」との関係をも考慮に入れて決定しなければならぬこととなります。一方、英語の wheat という単語の意味は、同じ穀物である rice、barley、oat、rye との関係で決まるわけです。

このように、言語における単語の意味は一般に、同種の単語の表す意味との関係によって決定されるという性質をもっており、このような観点から見た単語の集合を体系と呼びます。「個体の集合」「穀物の集合」「家畜の集合」「移動することの集合」などの集合を考えた場合、言語ごとにそれに属する単語は異なるものです。従って、単語の意味を考える場合には、それが属する体系全体をも考慮に入れなければならないこととなります。

2 個別言語の体系

言語における「体系」とは、一般的には、言語的要素の集合のことですが、ある集合に属する要素は、言語ごとに異なるのが普通ですから、それぞれの要素がどのような特徴によって区別されるかも、言語ごとに違つてきます。

例えば、日本語の音素で「両唇音」と呼ばれるものは /p, b, m/ ですが、中国語の両唇音の音素は /p, pʰ, m/ (pʰ は「有気音」) です。これらの両唇音はそれぞれ、p <無声、無気、非鼻音>、b <有声、無気、非鼻音>、m <有声、鼻音>、pʰ <無声、有気、非鼻音> という特徴をもっています。日本語の3つの両唇音を区別するための特徴は <有声：無声> <鼻音：非鼻音> という音声的対立ですが、中国語であれば <有気：無気> <鼻音：非鼻音> という対立となります。

7 共時態と通時態

POINT

- 言語からその変化という特徴を取り除いた側面を共時態、言語の個々の要素の変化していく側面を通時態という。

① 共時態と通時態

言語は必ず変化するものです。その理由はまだ解明されていないのですが、言語の本質が現在のどのような状態であり続ける限り、言語は変化するように運命づけられていると考えてよいでしょう。19世紀にヨーロッパで発達した比較言語学は、言語の変化、特に個々の音の変化に注目し、それなりに大きな成果をあげました。しかし、音の変化が解明されたとしても、それだけでは言語一般の性質や、個別言語に存在する構造や体系を知ることができません。

言語の性質やその構造・体系は、言語のある特定の時点における静的な状態を分析することにより導き出されると考えられます。そのような、言語から時間軸に沿った変化という側面を捨象した側面を共時態と呼びます。これに対し、個々の音や単語などが、時間軸に沿って変化する側面を通時態と言います。

② 言語研究の対象

文法および語彙・音素の体系を共有する個人語の集合をラングと言いますが(④第4節)、そのラングについて、共時態と通時態の2つの側面を区分します。言語学が言語の本質を解明することを目的とする学問であるのならば、その対象はラングの共時態でなければなりません。ラングの共時態の分析により、ある時点における単語の配列の規則や語彙・音素の体系が初めて明らかになるのです。

もちろん、言語変化の研究も言語学の取り扱うべき重要な課題の1つではあります。しかし、変化というものは、ある2つ以上の時点における状

態を比較することによって明らかになるものですから、言語変化の姿を明らかにするために、2つ以上の時点における共時態を記述して、それらを比較するという方法がとられるべきです。音素であれ、単語の意味であれ、文の構造であれ、共時態の分析によって初めて正しく求めることができるようになるのです。

従って、言語学がまず研究の対象とすべき側面は、ラングの共時態だということになります。特に、意味や文法の場合は、分析すべき言語資料の量が必然的に大きくなりますから、それを容易に獲得することができるのは現代語であり、この分野では現代語という共時態の研究が、他の時代の共時態の意味・文法研究のモデルを与えています。言語学では、共時態の研究を行う分野を共時言語学、通時態、つまり言語の歴史を行う分野を通時言語学と呼んでいます。

8 言語研究の方法と言語学の諸分野

POINT

- 言語研究では、言語資料をもとにある仮説を提出し、その仮説を検証するという方法がとられる。
- 言語学は、言語のレベルに応じて分野が存在し、関連する領域との関係でさらに分野が拡大する。

1 言語研究の方法

言語学は、実際に使われている、あるいは過去に使われた言語資料をもとに、その構造や体系を記述する学問として規定することができます。要素の配列の規則を求めるのが構造の研究であり、ある要素が他の同種の要素との関連でどのような働きをしているのかを調べるのが体系の研究です。個別言語によって、配列の規則や要素の機能は異なっているものですから、言語の本質から演繹的にそれらを決定していくという方法には限界があります。

従って、通常はある範囲の実際の言語資料を観察することによって、規則や機能を記述・説明する仮説を提出し、その仮説が妥当であるかどうかを、さらに広い範囲の資料によって検証するという帰納的な方法をとります。もし最初の仮説によって与えられた資料の記述・説明が正しくできれば、その仮説を修正する必要はありませんし、その仮説によって記述・説明できない資料があれば、仮説を修正することになります。

例えば、日本語の助詞の「は」が、すでに話題になっている事柄(旧情報)に属する名詞を表すとする仮説があるとします。この仮説は、次のような例を説明することはできません。

(1) ある人が来ました。その人は白い服を着ていました。

2番目に出てくる「人」は、最初の文の「人」と同じ個体を指していることから、旧情報に属すると考えられます。しかし、これでは次のような例の「は」を説明することができません。

- (2) 今、雨は降っているが雪は降っていません。
 (3) 犬は、飼い主に忠実です。

(2)の「は」は、「対比」の働きをされると言われますし、(3)の「は」は「総称的」な用法だと言われます。従って、助詞の「は」の働きを正しく説明するには、最初の仮説を修正する必要があります。

2 言語学の諸分野

言語学には、文・単語・音それぞれのレベルに対応して中核的な分野があり、さらに、言語は人間の思考や感情を伝達する重要な手段ですから、言語に関わる領域との関係で、いくつもの研究分野があります。

- 音韻論：音素の体系やアクセントなどを研究する分野。
- 形態論：単語および形態素(第3章を参照)の設定や、その分類などを対象とする分野。
- 統語論(統辞論、構文論)：文の構造、つまり文における単語(形態素)の配列の規則を研究する分野。
- 意味論：単語および文の意味の記述を行う分野。
- 語用論：言語の使用される状況と単語・文の意味の関連性を対象とする分野。
- 社会言語学：言語と、それを使用する人間の社会的な属性性との関わりを研究する分野。
- 心理言語学：言語の産出および理解の心理的メカニズム、また言語の習得過程を研究する分野。
- 歴史言語学：言語の歴史を対象とする分野。通時言語学。
- 言語類型論：世界の諸言語を、ある特徴に基づいて類型化し、特徴の間の関係を考察する分野。
- 数理言語学：数学を使用して、文の構造や意味を記述することを目的とする分野。

KEYWORD

仮説/検証